
塩鮭味の口づけ

浅葉りな

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

塩鮭味の口づけ

【Nコード】

N2847C

【作者名】

浅葉りな

【あらすじ】

ある雨の日、咲希は少年を拾う。そうして、しばらく、少年を家に置いてやることにしたのだが

電柱の陰に、なにかから隠れるようにして、少年がうずくまっていた。

かさもささず、雨具もつけず、ただただ濡れるに任せている。伸び気味の黒髪が白色人種のような真っ白い肌に張りつき、水をしたたらせていた。どこか空虚なつゆ草色の瞳は、灰色の天へと向けられている。少年の着ているシャツには水がしみていて、優美な身体の線を浮かび上がらせていた。

そのあまりの寂しげな様子に、雨宮咲希は思わずかさを差しかけていた。

「具合でも悪いのか？」

咲希が訊ねると、少年は、

「……放つといてください……」

心底傷ついているのだと、ひと目でわかる顔で答えた。

「俺、こんな雨の中におまえみたいなの放置して行けるほどに冷たくないよ。家、すぐそこだから寄ってけよ」

あんな顔をされたら、いくら本人が放っておいて欲しいと言ったとしても、そうするわけにはいかなかった。

誰かが声をかけてやらなければ、水に溶けてどこかへ消えてしまいうような少年なのだ。美しいけれど、とてもとても儚そうで、つい手をさしのべたくなくなってしまう。

咲希は少年の腕をつかんで、無理に立たせた。そうしてみると、少年の背が意外に高いことがわかった。165センチの咲希よりも十五センチほど高い。

「ほら」

少年にかさを握らせ、咲希は濡れるのも気にせず、足元の水を蹴散らしながら歩いた。

玄関先に着くと、少年の手からかさを奪い取った。咲希はかさを

たたみ、かさ立てに突っ込む。

「そのままそこにいる気かよ。風邪、ひきたい？」

咲希が家の中に入っても、まだ少年は立ちつくしていた。

なにを考えているんだろうと、咲希はため息混じりに言っていた。少年は、ようやく首を横に振る。けれども、その仕種にはどこか遠慮やためらいが含まれている。

「遠慮なんかするなよ。つまりはさ、俺の自己満足なんだから。ちよっといい人気分味わわせてやろう、くらいの気分でいればいいだろ」

咲希は少年を家の中にひっぱり込んだ。少年はたたらを踏んだが、バランスを崩して倒れてしまう。

咲希は少年にのしかかられるかっこうになった。中学校の制服である濃紺の詰襟が、少し濡れる。

「あ……ごめん……」

「いや、こつちこそ。どつかぶつけなかったか？」

申しわけなさそうな顔をする少年に、咲希はなんでもないことのように言ってやった。本当は転んだときに足首をひねっていて、平気そうな顔をするだけでもひと苦労だった。

「オレは、平気です……」

今にも泣き出しそうな顔で、少年は咲希を見ていた。

咲希は微笑んで、少年の、濡れて指にからみついてくる黒髪をいじった。

「敬語なんて使うなって。タメか、いつこ上だろ？」

「ああ……うん……」

少年は、なにかを探すかのように視線をさまよわせた。

「咲希、でいいよ。おまえは？」

くす、と笑って咲希が言っていると、少年は顔を晴れさせた。誰もが見とれるに違いない、光り輝く笑顔だった。

「仁科悠。よろしく」

「ああ、よろしく」

悠が立ち上がったって、咲希に手をさしのべてきた。咲希はあいまいに笑いながら、その手をつかむ。

悠の手は繊細な容貌に反して男っぽく、咲希は女扱いされているような気分になった。けれど普段なら不快で仕方がないそれは、どういうわけか心地いい。やわらかい羽根で背筋をなでられたときのような、くすぐったくて、それでも楽しいという感覚に似ている。

咲希は笑った。そして悠も。

悠の着ていた服を脱がせ、洗濯機の中に放り込む。とりあえず着ておけと持ってきた咲希の服は、当然ながら丈が短かった。なんだから、小さな貝に無理をして身体を押し込めているヤドカリのようだった。

「そこ、座れよ。紅茶好き？」

「ありがとう」

てきぱき動く咲希に向かって、悠はただそれだけ、言った。

いつもは自分が座っているイスに悠を座らせ、先は妹のイスに座る。妹のイスは、三匹のくまに出てくる、大きなくまのイスのように、クッションがやわらかすぎた。

真っ白なカップにラベンダー・ティーを満たし、悠に勧める。なにがあったのか咲希は知らないが、落ち着かせた方がいいと思ったのだ。

「で、どうしてあんなとこにいたんだよ」

カップに口をつけながら、咲希はいきなり核心を突いた。

まだるっこしいことは苦手なのだ。白黒はつきりしていないと、どうにも気持ちが悪い。

咲希はじつと悠を見つめた。

悠はつゆ草色の瞳をこれ以上ないほど大きくした。まばたきひとつ、しない。

「いや、あの……」

しばらくして、悠は視線を落とした。

「言いたくないなら、いいや」

遠慮でもなんでもなく、咲希は心からそう言った。ちょうど飲み頃のラベンダー・ティーを、ぐびりと干す。

そのあとさらに間があつて、やがて、悠が吹き出した。

「可愛いんだね」

声を震わせた悠に口にされ、咲希はむくれた。

可愛い、という言葉は、少なくとも咲希にとっては誉め言葉ではない。

今は湿気を含んでそうでもないけれど、毎朝変なくせがついていて苦労させられる薄茶の髪や、マッチ棒が三本も乗ってしまいそうな長いまつげや、虫の代わりに好奇心を閉じ込めた琥珀のような瞳や、薔薇の花弁そのものだと表現されることが多くちびるは、咲希にとってはコンプレックスを刺激する要因に過ぎないのだ。

他愛もない会話の中にふとつぶやかれる「可愛い」のひとつも、深窓の令嬢のように扱われることも、すべてが屈辱だった。

咲希は間違いなく男で、だから、それを知りつつもただ女顔だというだけで女扱いしてくる人間が嫌いだ。

なけなしのプライドが、自分のすがりついていたアイデンティティが、崩れて行くような気がするから。

「ああ、ごめんね」

ぼや、と笑つて悠が言う。

「あんまりにも潔くて、可愛いって思ったから」

「ナニソレ」

潔いのと可愛いのと、どんな関連があるというのだろう。咲希のお世辞にもよろしいとは言えない頭の中では、どうしてもイコールで結べない。

「どんなことでも、きれいに退ける人ってかっこいいと思うから。でも、咲希は子供だから可愛い、でもいいかなと」

「うつわ、それちょっとム力つく！ 俺、もう十四だし子供じゃないぞ」

「子供じゃない、ってムキになるのが子供だよ」

雨の中にいたときとはまるで別人だ。大人の顔で悠が笑う。

咲希は頬を膨らますしかなかった。

そのあと、長い間、ふたりは話し続けた。たとえ、千年ぶりに再会した友人同士だって、こんなに多くは語らないだろう。

しばらくして心地よい沈黙が訪れて、どちらともなくそれに身をゆだねた。

「理由は言えないけど、しばらくここに置いてくれないかな」

ぽつり、とつぶやかれた悠の言葉は、沈黙を裂く優しい刃だった。

「いいよ」

応じる先の声は、裂けた沈黙を繕う縫い針と糸だった。

「母さん、頼みがあるんだけど」

仕事を終えて帰ってきた母・美知子に、咲希は開口一番そう言った。

美知子はなめらかな動作で咲希に顔を向けた。

美知子はまさしく、大和撫子といった言葉がよく似合う。白髪まじりの髪をひとつにまとめ、今では珍しい和服姿なのだが、それが不思議としつくりきていた。

「いいわよ」

勤めがつかいののか、美知子は声に疲れをにじませていた。

「いい、って……オレ、まだなにも言っていないけど」

「だって、咲希なら無理を言ったりしないでしょう」

「さらり、と言う美知子。」

「すごいね」

悠が心底感動しているような声を出した。

「ところで、こちらは？」

あくまで穏やかに美知子が促す。彼女はどこまでも静かで、優雅だ。

やはり、小料理屋を切り盛りしているだけのことはある。咲希の父が亡くなってから、ふたりでやっていた店を、彼女ひとりで開けているのだ。

「俺の友達。しばらく泊めてやりたいんだけど」

「そう。おふとん出さないかね」

美知子はあつさりと言って、割烹着を身につけた。すぐに夕飯の支度に取りかかる。

話は、それで終わりだった。

咲希は強く悠の手を握った。悠も同じようにした。

隣に座る妹の由希が、不躰な視線を悠に向けているのを見て、咲希は苦い顔をした。

長方形のテーブルの片側に咲希と由希が、そしてその向かいに美知子と悠が座っている。咲希の父が残してくれたこの家は洋風で、どこもかしこもとてもきれいで、だから美知子には似合っていないかった。咲希や由希には似つかわしくとも。

「なにか顔についてる？」

悠が苦笑した。

「別に。でもきれいだな、って思って」

由希は悪びれもしなかった。はしたなく、たくあんを頬ばりながら笑う。

「そう？ でも、由希ちゃんと咲希がふたりで並んでる方が、ずっときれいだよ」

少し咲希が手伝った鳥のからあげが、悠の口の中へと消えていく。悠は食事の最中でさえ上品で、そしてなにより幸せそうだった。

悠に見つめられ、咲希は痛いような気がした。胸の奥に生まれた、決しておさまらない、痛み。

「きれいって、どこが？」

痛みを消してしまいたくて、咲希はみそ汁をすすめるのをやめて口を挟んだ。

「同じ顔がふたつ並んでるのって、すごくきれいじゃないかな」

由希と咲希は双子なのだ。まるで同じ人間のようになり、そっくりなふたり。

もちろん、よく見れば咲希の方が可愛らしいことや、由希は凜とカッコいいタイプであることが、すぐにわかってしまうのだけれど。「でもあだし、おにーちゃんと仁科さんが並んでもきれいだと思っわ」

悠と自分が並んでいるさまを想像して、どこがそんなにきれいなのかと咲希は思った。

「そういえば、仁科さんっていつまでいるの？」

世間話の延長のように、由希が言った。

けれどそのとたん、悠の表情が凍りつく。そしてみるみるうちに、寂しそうな悲しそうな顔になる。

雨の中をとぼとぼと、濡れて重い身体を引きずって歩く子犬のよう。そんな、顔。

氷のようになってしまったつゆ草色の瞳を見ていると、咲希の胸はきりきり痛む。

決して抜けない棘の痛み。

膿んで腐った傷口が、じくじくと黄色くて汚らしいものを垂れ流すのにも似た、痛み。

そんな顔されたら

そこまで考えて、咲希は額を押さえた。

されたら？

いったいどうなるというのだろう。

たしかに悠は、するりと咲希の心に入ってきた。幼なじみである

かのように、咲希は悠を近しく思っている。

けれども、悠は先ほど拾った少年で。

「どうかした？」

心配そうな悠を見て、咲希は笑った。

よく、わからない。

咲希がトイレに行こうと廊下に出ると、バスルームの前で悠がたずんでいた。

悠がリビングを出たのは十五分も前のことで、だから咲希は首を傾げた。

「悠？」

声をかけると悠は飛び上がって、ゆっくり首をめぐらせた。

「咲希」

どこか安堵したような、落ち着いた声。

「どうしたんだよ」

「うん」

悠は視線をさまよわせた。定まらない悠の視線を追いかけていたら、咲希は頭が痛くなってしまった。

「怖くて」

「……怖い？ なにが」

「水が」

悠はうつむいていた。さらされた肌が赤かった。少し、震えているようだ。

「なら、一緒に入るか？」

「でも」

「いって」

咲希は悠に抱きついた。走って行って飛びついたのに、悠はびくともしなかった。

なんとなく、可愛いと思った。悠は間違いなく、可愛いという言葉が似つかわしくない。にも関わらず、悠はとても可愛かった。咲希は服を脱ぎ捨てて、バスルームに入る。きゃしゃな手をさしのべ、微笑む。

悠はためらう素振りを見せた。

けれどもおそおすと、咲希の手を取る。

「でもさ、水が怖いなんて、大変だな」

しみじみ咲希は口にした。

「今までは平気だったから」

うしろ手に扉を閉めて、悠は目をつむった。注射を怖がる子供のように見えて、咲希はいとしさがこみ上げるのを感じた。

咲希はもともと、頼られるのが好きなのだ。捨て猫や捨て犬だつて、見れば必ず拾ってきてしまう。美知子がアレルギーなので、里親を見つけるまでの仮預かりではあつたけれど。

悠には捨て犬のような雰囲気がある。だから目がそらせない。

咲希はシャワーヘッドを取った。湯温はぬるめ、勢いも弱めにした。

悠をタイルの上に直に座らせ、軽く頭をなでてやる。

「怖かったら、目、つむってるよ」

「あ……あの」

悠が遠慮がちに口を開く。

「ん？」

「手……」

寒さに震える子うさぎのように、身を縮こまらせながら悠がつぶやいた。

咲希は笑って手を出してやる。そのきゃしゃな左手を、悠の大きな手が握った。

悠はどこかアンバランスだ。身体は細くとも、必要な筋肉はしっかりついていて、子供とは明らかに一線を画している。それなのに、こうして咲希にすぎり、幼い子供のようにおびえている。

「大丈夫、俺はここにいるよ」

まずシャワーヘッドを近づけて、悠の身体中を濡らす。それから、スポンジに水をたっぷり含ませて、遺跡からの出土品を洗うように丁寧に洗ってやった。

触れあっている手から、悠の震えが伝わってきた。

「怖がらなくていい」

なだめる言葉を口にしながら、やはり自分は世話好きなのだと思希は思う。普通なら、見知らぬ少年を拾い、その日のうちに仲よくなり、あまつさえ一緒に風呂に入ってやるなてことはしないだろう。ただでさえ、バスルームは狭い。

けれども、咲希はそんな自分を気に入っているのだ。

聞こえてくる、苦しげな息づかい。

時折混じる、小さくうめくような声。

それらが耳について離れず、咲希は暗い中で目を開けた。

しばらくすると、夜闇に目が慣れてくる。咲希はふんからはい出した。

闇の中、光のたりない影絵のようにうつすらとぼんやりと、家具の輪郭が浮かび上がっている。狭くて殺風景な、見慣れた咲希の部屋だ。

けれども見慣れないものが、ベッドのすぐ脇にある。

悠、だ。

客用のふとんにくるまって、悠が寝息をたてていた。けれど、寝息は一定ではなく、浅くなったり深くなったりを繰り返している。額にもしわが寄り、汗の玉が浮いていた。

「悠？」

咲希は呼びかけた。

悠がびくり、とする。

「悠」

咲希はかまわず、ベッドから降りた。悠の枕元にしゃがみ込み、汗にまみれた髪を手で梳いてやる。

それだけで、額の縦じわが薄くなった。

悠が手を伸ばした。指が何かを探す。

「大丈夫」

咲希はその手を握り、優しく優しくささやきかける。

悠は、今はもう穏やかな寝顔をしていた。母親に抱かれて眠る幼子の顔は、きつとこんなだ。

時計を見ると、夜明けまでもう二時間もなさそうだった。

咲希は、しばらくこの大きな子供につきあってやることにした。

どうせ、早朝ランニングのために、毎朝早いのだ。それまでに身体を完全に目覚めさせておくのも、いい。

「そうやってると、恋人同士みたいね」

と、由希があきれたように言った。

「動くといけないよ」

起き上がるうとする咲希を、悠がたしなめた。

学校から帰ってきて、耳がガサゴソすると言ったら、悠が耳かきをしようとして出てくれたのだ。咲希はどうしても、自分で耳かきをするのが苦手だったので、ありがたくその申し出を受けた。

そんなわけで、テレビを見ながら悠の膝の上に頭を乗せるといっ、なかなか楽な姿勢になっているのだ。フローリングの床はひんやりと冷たく、悠の耳かきもツボを心得ていて、すこぶる気持ちがいい。

「会ってから三日で、よくそこまで打ち解けられるわよね。あたしには真似できないわ」

「相性いいんだろ」

素っ気なく、咲希は答える。

悠はあの日から、咲希の家に居候していた。咲希と同年のはずなのに学校にも行かず、理由を訊ねてもあいまいに笑っただけだ。代わりに、毎日選択や掃除をしているらしい。

事情があるだろうから、咲希はあえてなにも言わないでいる。いつか、話してくれるだろうと思ったので。

「気持ちいい？」

耳かき棒についているやわらかい綿の部分で、悠が耳の中をくすぐってくる。

微妙な感覚がくせになりそうなほどで、これなら毎日やってもらいたいかも……と、咲希は思ってみたりする。

咲希は答える代わりに、陽の当たる縁側に寝そべった三毛猫のように目をすがめた。

「一生やってなさい、って感じね」

由希が大仰にため息をついた。

そのとき、インターホンが鳴る。

「オレが出るからいいよ」

耳かき棒を横に置き、悠は立ち上がった。

「いい嫁になりそうよね」

「嫁って……」

「いいじゃない。おにーちゃん、もらえば？」

咲希は、軽く由希の頭を叩いた。

咲希も悠も男なのだ。それを嫁だのなんだのと、ナンセンスだろ。第一、悠に失礼だ。

「あのなあ、」

「ねえ、なんかガタガタ聞こえない？」

言いかけた咲希をさえぎり、由希が眉を寄せて言った。

耳を澄ませば、由希の言う通り、玄関の方で音がしている。

「遅いし……行こうか？ たちの悪いセールスかもしれないし」

由希は答えなかった。緊張した面持ちで腰を上げる。

玄関まで小走りに行くと、そこには異様な光景が広がっていた。色素の薄い、悠と同じ色の瞳をした女が、悠の首を絞めていたのだ。

女は黒いワンピース姿で、靴ははいていなかった。どこか尋常ではない雰囲気を持ただよわせている。全身濡れそぼち、水がしたたっていた。

「悠！」

咲希は悲鳴のような叫びを上げた。

気づいたららしい悠が、くちびるを動かす。何度も、何度も。

コナイデ、と。

「あなたがいけないのワガママを言うからあの人にそっくりだからあの人にあの人にあの人に……！」

女は言いながら、悠の首を絞め続ける。彼女の目は血走り、明らかな殺意がそこにはあった。

悠はさして抵抗もせず、ただされるがままになっている。

「由希」

少しうしろに立っている由希と目をあわせる。それだけで、通じた。

由希はリビングに駆け戻る。110番をしに行ったのだ。

咲希は走って、女に身体ごとぶつかっていった。

女は悠から手を放す。咲希をにらみつけてきた。

「どうして邪魔をするの」

女が紅いくちびるを横に割った。美しい、けれどおぞましい表情だ。

「咲希……」

悠は咲希をかばうように立つ。咲希はそれを拒否し、悠の前にまわった。

「なんなんだよ、こいつ」

うしろの悠にそっと訊ねる。

「母だ……」

悠は肩で息をしていた。顔が真っ赤だ。けれども、悠の表情にはなんの感慨も伺えない。

胸が締めつけられる気がして、咲希は悠の手にさわった。

「どいてちょうだい」

「やだね」

「聞いたでしょう、その子は私の子供なの。私のものよ」

悠の首を絞めていたときとは違って、穏やかな、わずかに正気を感じさせる声音だった。裏にもろく危険な凶器がひそんでいることがわかっていたとしても、信じてみたくなるほどに。

「それともあなたも悪い子かしら？ 悪い子にはおしおきしなくちゃいけないわだから悠も……」

「ふざけるなよ」

咲希は怒りを抑えるのに苦労した。抑えても抑えても、怒りはあふれてくる。

悠の母だというこの女は、悠をもののように思っているに違いない。どんな事情があるのか咲希にはわからないけれど、それでも、おもしろくない。

悠はあんなにも優しく、暖かで、繊細で。そんななにもかもを無視して、ただもののように扱い、所有物として認識するなど、許せない。

倫理どころ、という以前に、悠が悠であるから許せないのだ。

「咲希、いけないよ」

女につかみかかっていこうとする咲希を、悠が止める。

「なんでだよ！」

「これは、オレの問題だから」

悠の顔に広がった、かすみ草のような微笑みに、咲希の胸がちりと痛む。

デモ俺八、オマエガ心配ダヨ。

心の中で、咲希はつぶやく。もちろん、悠には届くはずもないけれど。

「悠、お母さんのために死んでちょうだい」

女が伸ばしてくる手を払いのけ、悠は首を振った。

「どうして？ 昔はあんなにもいい子だったのに。どうして、どうしてえっ!？」

半狂乱になつて悠に手を伸ばし、女はわめいた。

咲希は数歩あとずさった。悠も咲希と同じだけ、退く。

その刹那、町を切り裂くサイレンが聞こえてきた。

次第に近づいてくる音は、ひとつではなかった。

そして、薄気味悪かった。

それから起こったことは、あまりに非日常だった。

パトカーが何台も到着して、二十人は下らないだろう警官が押し寄せてきたのだ。制服姿の警官がわらわらと狭い玄関につめかけ、よつてたかつて女を取り押さえるさまは、いつそシユールでさえあった。

「凶悪犯は取り押さえました。ご安心ください」

警官のうちのひとりが、人好きのしそうな笑みを浮かべて言った。

「……………?」

凶悪犯、などというものだっただろうか。咲希と悠は顔を見あわせた。

「あの、つかぬことをおうかがいしますが、どつという連絡が行つたんですか？」

悠がためらいがちに口を開いた。

「こちらのお嬢さんからの通報によりますと、空手と柔道の黒帯保持者の女性が、玄関先で暴れているとのことでした」

いたつてまじめな顔で述べる警官の顔を、咲希はまじまじ見つめてしまった。

近頃、警官＝不祥事などという図式ができあがりつつあったのだ

が、そんな冗談のようなことを真顔で口にしなくてはならないなんて大変だなあ、にイメージが変わった。

「……由希のやつ……」

どうせ、由希があることないことわめいたに決まっている。電話を取った人間があわれに思えた。

大げさな由希の犠牲者である女が、警官に連れて行かれる。暴れてはいたが、大勢の男に女の細腕で敵うはずもなかった。

静寂が、訪れる。

「どうなるんですか　あの人」

「まだわかりません。どんな被害がありましたか」

「悠を殺そうとした、かな」

咲希は悠をうかがった。悠は別段気にした様子もなく、前を見ていた。

「そうですね……。また、お話をおうかがいするになるかもしれません」

頭を下げて去っていく警官の背中に、悠は深々とおじぎした。

それとは入れ違いに、白衣の男が入ってくる。

どこか冷たい印象の男だった。顔立ちが悠とよく似ているが、正反対のイメージだ。背は悠よりも高い。肌も悠より黒い。瞳も鴉の羽根のような黒色だ。

「息子がお世話になりました」

咲希が誰何するよりも早く、男が言った。

悠と男は、相違点を挙げればきりが無い。それでも、男が悠の父親だというのは、ひと目で本当だとわかった。

「悠、うちに来なさい」

「……どうして」

「妻をやつと説き伏せた」

「今さら、なにを。母さんを捨てたのに」

「捨てた、か。妻がいるのを知った上での関係だ、こうなることははじめからわかっていたはずだ」

男は冷たく吐き捨てる。

「オレは、あなたの息子にはなりたくない」

悠の言葉に、男が片眉を上げる。端整な顔立ちだけに、かえって寒々しい仕種だった。

「親なんて要らない。この近くに部屋を借りて、そこでひとりで暮らすから。学費と生活費さえ、出してもらえれば」

悠は毅然としているけれど、震えていた。つないだ手から震えが伝わってくる。

「いいだろう」

咲希が子供でなかったら、あんなことは言わせておかないのに。だから、子供でいるのはいやだ。

そして、悠と自分が他人であるということが、いやだ。口を挟めない。

咲希は悠の腕を抱きしめた。

外では、激しい雨が降っている。

咲希の部屋でふたりきりで、咲希と悠は額をつきあわせて話した。どちらかと言えば、悠が話して、咲希は相槌を打っていただけだったが、それはまさしく、語りあう、という以外に表現しようのないことだった。

悠の母は、妻もあるあの男の愛人だったということ。

あの男に捨てられてから、母はおかしくなってしまったということ。

咲希と悠が出会った雨の日、悠は母に殺されかけたのだということ。

そのときから、大量の水がだめなのだということ。

そんなことを聞かされながら、咲希は、その場限りのなぐさめを口にはしなかった。悠は多分、それを望んでいないだろう。

だから、ただ、そこにいた。

日々はめまぐるしく過ぎていった。咲希が、自分はこまねずみになつてしまったのではないかと疑い出すほどに。

何度か警察に呼ばれて事情聴取を受けたり、悠の母が入院したことを聞かされたりした。

悠は相変わらず咲希と一緒にいた。小ガモが親ガモのあとをついて歩くさまによく似ていた。

悠は咲希と同じ中学に転校してくることにしたらしく、その準備も進めていた。

多分、心細いのだろう。咲希はそう解釈して、悠の好きなようにさせておいた。

なにも、知らずに。

寝苦しくて、目が覚めた。

明日は悠の引越したから、寝ておかなくてはいけない。そう思つて、無理に目を閉じる。

悠のマンションがやっと見つかったのだ。歩いて、咲希の家まで三分とかわからない場所だった。今は、悠は咲希の家にいるのだが、ずっとそういうわけにもいかず、仕方なく引越すことにしたらしい。

隣では悠が眠っているはずだ。悠は、夜眠りにつくのを怖がるので、咲希がいつも隣に寝てやっていた。

そういえば、悠はどうしているだろうか。

ふと心配になって、身体をひっくり返す。悠と目があつた。

「あ………」

ばつの悪そうな顔で、悠が目をしばたたかせた。
「ん？」

咲希は不審に思っ、起き上がる。その拍子にふとんがめくれた。
悠が真つ赤になって股間を押さえる。

「おまえ、Hな夢でも見てたのか？」

「あつ、いや、別に……！」

どうやら凶星だったらしい。悠は急にあたふたしはじめる。

「気にするなよ、男同士なんだし」

「でも……」

「いって、いって。でさ、おまえのどんなカンジ？」

咲希は近寄っていって、首を傾げてみせる。

純粹な好奇心だ。野外活動でも、周囲がまじめだったからかそういう話にはならなかったし、ちよつと足の爪をはがしてしまっていたのでふるにも入れなかった。咲希は、他人のものを見たことがないのだ。

「どんなカンジって 別に普通だよ。どうして、見たいなんて」

「他人のって見てみたくないか？ なんなら俺のも見せるけど」

とたん、悠が耳まで赤くなる。水をかけたら即座に蒸発してしま
いそうな様子だ。

「……悠？」

咲希は顔を近づける。

悠はあどずさるうとした。が、ベッドがそれほど広いわけもなく、
落ちてしまう。

部屋が揺れたような気がして、咲希は天井から下がっている電気
のひもを見た。揺れてはいない。

「そんなにヤだったか？」

「そういうわけじゃないけど……」

腰をさすりつつ、悠はあいまいに語尾を濁した。

咲希は八タキを持ったまま伸びをした。

「ごめん、手伝わせて」

「いいって。昨日、見せてもらったしさー……やっぱ、身体大きいとアレも大きいのかな？」

「あはは……」

悠は乾いた笑い声をたてた。

別に、誉めているのだから、あんなふうに笑うことはないではないか、と咲希は思う。昨夜、比べてみたのだけれど、悠の方がふたまわりほど大きかったのだ。

コンプレックスを感じなくてもなかったけれど、身長差が十五センチもあるわけだから、こんなものかな、などと思っていた。背が低いのにアレだけ大きかったら、それはそれで怖いだろう。なにしろ咲希は発展途上　だと本人は思っている　なのだ。

「もうほとんど片づいたし、お茶でも飲もうか？」

笑い声の延長のような調子で悠が提案した。

「あ、あのティーセット使ってみたいよな」

咲希ははしゃいだ声を出す。気に入って買ってきたティーセットを、使いたくてうずうずしていたのだ。

悠の荷物は、そう多くなかった。昔住んでいたところからはほとんどなにも持ってこなかったからだ。

ほとんどが新品か、咲希の家で使っていたもの　それも、パジヤマや歯ブラシなどだ　ばかりだ。ティーセットも、新しくそろえたもののひとつだった。

荷解きも簡単で、昼過ぎからはじめたというのに、夕方には終わってしまった。

部屋は2LDK、ひとりに住むには少々広い。けれど、咲希が遊びに来るだろうことを考えると、ワンルームでなくてよかったのかもしれない。

咲希はキッチンに走っていく。

モノトーンでまとめられた部屋は、どこか大人びている。

悠の部屋は、たつての希望ですべてモノトーンで統一されていた。こぎつぱりとしているところがいいらしい。

だから、キッチンもモノトーンだ。そこをはじめに使うのが自分だ、ということが咲希には嬉しい。それは、処女雪に足跡をつけて歩く楽しさに少し似ている。

水を入れたやかんを火にかけ、その間にティーパックを用意する。咲希お気に入りのローズティーだ。

すぐに薔薇の甘い香りがただよいだす。

白いカップに、薄めの紅茶はよく映えた。

苦くならないようにティーパックを上げ、流しの三角コーナーに捨てる。

黒いプラスチック製の丸トレイにカップを乗せて、リビングに急いだ。ティーパックの紅茶ではあるが、香りがいい今のうちに飲ませたい。

「悠、これ」

真新しいテーブルの上にカップを置く。

悠は、咲希でさえも思わず見とれてしまうような表情をした。

「ローズティー？」

「ああ。よくわかったな」

カップに鼻を近づけもせず、ローズティーだと当てる悠を、咲希はなんとなく誇らしく思う。咲希の家に来たばかりの頃は、どれも同じだと思っていたらしい悠なのだ。

毎日咲希と一緒に飲んでいたので覚えた、と聞いて、長い時間とともに過ごした証のような気がしていた。

「咲希が好きだったから」

「……え？」

これは愛の告白だろうか。だとしたら、どうして過去形なのだろう。

「いや、だから、ローズティー好きだったよね？」

「そ、そうだよな……」

告白の言葉と勘違いしたなんて、口が裂けてもいえない。悠はなにも知らず、咲希の向かいで首を傾げているのだ。

咲希はごまかし笑いをするしかなく、それだけでは間がもたなくて、ローズテイーに口をつけた。

けれどそれはとんでもなく熱くて、舌がひりひり痛み出す。

「大丈夫？」

咲希の異変を察したのか、近づいてきて悠が顔をのぞき込んできた。

前髪が額に触れてくすぐったい。つゆ草色の瞳に間近から見つめられるのも、同じくらいくすぐったかった。

咲希はカップを置いて、口許を押さえた。紅茶は飲み下したものの、舌がひりつくのはおさまらない。

「ちよつと舌、見せて」

「ん……」

言われた通り、咲希はくちびるの隙間から舌を出す。

「火傷してるけど、大したことはなさそうだね……よかった」

先は舌をひっこめた。優しげに歪められた目を見つめながら、息を吐く。

悠はどういうわけか、近頃とみにきれいになった。咲希が拾ったあの頃だって、もちろんきれいではあったのだけれど。

今は、咲希でも見ほれてしまうほどのなだ。何気ない動作のひとつひとつが洗練されていて、かつなまめかしい。そう感じてしまう自分を、常々戒めている咲希だった。

「最近、注意力散漫だよな」

咲希はTシャツを引っばって、風を入れながら言った。汗で肌張りついたTシャツは、本当に気持ちが悪い。

「……悠？」

悠が黙り込んでしまったので、咲希は手を止めた。なにも、まずいことを言った覚えはないのだけれど。

黙ったままで、悠は咲希の頬に触れた。その手があごまで下りていく。

そして、悠がさらに顔を近づけてきた。弾力のある暖かいものがくちびるにさわった。

それはすぐに離されたけれど、咲希はしばらく硬直したままだった。自分がなにをされたのか、とっさには認識できなかったのだ。

キス、だった。

とても幼くつたないもので、子供の愛情表現にも近かったけれど、間違いなく、それは口づけ。

「ごめん……」

咲希が正気に戻った直後の、わずかに震えた声での悠の謝罪。

どうしてか、涙がこぼれそうになる。

咲希は悠を突き飛ばし、駆け出した。

靴をはくのももどかしく、手に持ってマンションから出た。

あそこには、いられない。

外の空気は咲希の肌をちりちりこがす。

見上げた空は、クリアブルー。

咲希の心中は、多分マールブルがレインボーか……。とにかく、あんな澄んだ色はしていなかった。

五日、だ。今日で五日目。

これだけ長く離れていたことなど、生まれてこの方、一度もないような気さえする。

悠。

気になって気になって、宿題だって手につかないのだ。そう、今日一〇〇m走で転んで膝をすりむいたのも、昨日の部活でうっかり息継ぎを忘れて二十五メートル泳いでしまったのも、すべて悠のせいなのだ。

ぼぎ、と不吉な音がした。咲希の手の中で、安物のシャープペンが真っふたつに折れている。

「いて」

細かなプラスチックの破片が、てのひらに刺さっていた。取り除くと、じんわりと血がにじんできてる。

シャープペンの残骸をゴミ箱に放り込む。

咲希は傷口にくちびるを寄せた。広がる、血の味。

「キズバンくらい貼るか……」

寝起きのヴァンパイアのような動きで、咲希は部屋を出た。

階下へ下りる階段は、ひとつひとつの段が大きい。咲希には少々歩みにくい。

悠がここにいた頃は、やんごとなき姫君であるかのように手を取られ、ふたりでゆっくりと上り下りしたものだっただ。

悠はいつも優しくかった。咲希になついてくれていた。だから咲希は、悠を信じていたのに。

すべて、下心があつてのことだったのだろうか。

だからあのとき、キスなんかしたのだろうか。

けれども、それなら、どうしてあのとき謝ってきたのか。

いくら考えても、咲希にはちつともわからなかった。知っているつもりだった悠のことを、実はなにひとつ知らなかったことには打ちのめされた。

ひとつわかることは、咲希は悠を信じたいのだということ。それだけだ。

いつもよりはるかに長い階段を降り、リビングに行く。キズバンは、いつもテレビの上に置いてある。

「あ、おにーちゃん。どしたの？」

由希は、コンビニのおにぎりを頬ばっていた。とても女とは思えない、咲希と似たような食べ方だ。

「ちよつと、ケガしたんだ」

「ふーん……久しぶりね。ケガするの。そういえばね、外に仁科さ

んぼい人がいたわよ」

「悠が……？ 雨なのにな？」

カーテンの隙間からわずかにのぞく外では、どしゃぶり雨が降っている。雷さえも鳴り出しそう。空は墨染めの真綿のような雲でおおわれていて、誰であろうと外出をためらうに違いなかった。

そんな日に、水がだめだという悠が、外出できるはずがないのだから、ひとりで！

「でも、仁科さんだったわよ、あれ」

おにぎりを飲み込んで、由希は、今度は断言した。

「どーせ、ケンカでもしたんでしょ。さっさと謝っちゃえばいいのに」

「謝っちゃえばって……」

事態は、そんなに単純ではないのだ。なにしろ、まだ整理がついていない。非常にデリケートな問題なのだ。

「あたし、今日から日曜まで部活の合宿だし、ゆっくり話しあえばいいんじゃない？ 母さんもまだ帰ってこないし。多少うるさくても迷惑にはならないわよ」

「あ、そうだったか？ おまえがいないと静かになるな」

「なによ、それ あ、そろそろ行かなきゃ。じゃーね」

由希は立ち上がり、ぱたぱたと出て行く。

目当てのキズバンを手に貼って、咲希は額に手を当てた。

気になる、のだ。

もし外にいたという人間が悠なら、どうして、わざわざ来たのだから。この雨の日に。

逢いに、来てくれたのだろうか。

もしもそうなら、会いたかった。会って、話をしたかった。どうしてあんなことをしたのかと、訊ねてみたかった。

咲希は指先でくちびるに触れた。

悠のくちびるの感触が、生々しく思い出される。あのやわらかさや、暖かさや、優しさや。

それらは決して、不快ではなかった。

はたして、悠はそこにいた。

道路の端、ちょうど咲希の部屋の窓が見える場所に、かさもささずに立っていた。

つゆ草色の瞳は、ただ、窓にだけ向けられていた。咲希には、悠が、それ以外のことはどうでもいいとも思っているかのように見えた。

濡れた黒髪の張りつく頬は、五日前よりもこけている。色は病的なまでに白かった。服もあの日と同じ、白いTシャツ。水を吸って肌に張りついていていた。

自分を捨てた母親を呼びたくとも許されず、眺めることしかできない子供。

雨の中をとぼとぼ歩く、あばらが浮いて、汚れている子犬。

悠の姿は、咲希にそんなものを連想させた。

込み上げてくる、いとおしさ。

なんだ。

あつさりど、咲希は思う。

そう、とても簡単なことなのだ。太陽が東から昇ることのように、明けない夜はないように。当然と言ってもいいほどに、まったく単純なことなのだ。

五日も悩むまでもなく、答えはとうに決まっていた。

あの、ふたりがはじめて出会った雨の日から。すでに。

「悠」

ささやくように、口にする。

悠は一瞬びくりとして、それからゆっくり振り向いた。その顔に、歓喜と驚きとがないまぜになった感情が浮かび、そして広がる。

この雨音の中、かすかな声に　咲希の声に気づいた、悠。咲希

は手を伸ばして、待った。

「咲希……ごめん、ごめん……」

悠が駆け寄ってきて、ひたむきに繰り返す。

咲希はすっかり冷えた悠の身体を抱きしめた。悠は咲希よりも大きくて、腕はまわりきらなかつた。

「中に入るう？」

咲希は優しくうながした。悠は咲希をうかがう。咲希はうなずいてやる。

いくぶん安心したようではあつたが、まだどこかおびえた様子。色濃く残す悠から身を離し、咲希はその手を引いて中に入った。

そのまま玄関で待たせておいて、バスタオルを取ってくる。

「よく、あんなとこにいられたな」

いたわりを込めて、身体を拭いてやる。まずは手足、そして胴、顔、髪。濡れたＴシャツは脱がせた。

「どうしても、会って謝りたかつた……」

「謝る、ね？」

「その……気持ち悪かつたよね？ ごめん……もうしない。誓うよ。だから、嫌いにならないで……」

悠の頬を水滴がすべり落ちる。前髪からなのか、目からなのか、咲希にはわからなかつた。

「嫌いになんかならないって」

「嫌いになれるはずがないのだ。」

「おまえ、ちゃんと食べてる？ またやせたよ。気がするけど」

頬の水滴をタオルで吸い取り、咲希は言う。

「五日前に紅茶飲んだっきり……かな……」

「なんで食わないんだよ。餓死する気か？」

「だって　咲希に、嫌われたかと思つた……。あんなことしたから」

咲希は、悠の頬を軽く叩いた。いい音がする。

「根本的に間違つてるぞ、それ。とりあえず上げれ」

きよとんとしている悠は、咲希がキッチンへ向かうとついてきた。

咲希は無言で、悠の前に丼を置いた。中身は、できたての鮭茶漬だけ。わざわざ焼いた塩鮭の身を、咲希が手ずからほぐして入れている。かけた茶の温度はぬるめだ。

五日もなにも食べていない悠には、お茶漬けあたりがちょうどいいだろう。

それに、悠は勘違いをしているのだ。それをゆっくり正さねばならない。そのためには、腹ごしらえも必要だ。

咲希は悠の向かいに座った。

「どうして、あんなことしたんだ？」

悠が盛大にむせる。咲希は黙って水を差し出した。

「ごめん……」

「謝るなよ。俺は理由が聞きたいだけなんだからさ」

悠は答えず、大きなスプーンで少しずつ鮭茶漬を口に運んだ。

多分、考えているのだろうとわかったから、咲希はただ待った。

「好き、なんだ」

よく耳を澄ましていなければ聞こえなさそうな音量で、悠がつぶやいた。

「キスとか、その先とかしたいって思うくらいに？」

「ごめん……ちゃんと、忘れるから……だから……」

ぽた、と、テーブルに水滴が落ちる。悠はうつむき、肩を震わせた。

咲希は大仰にため息をついた。立って、悠のそばまで歩いていく。「悠」

首に腕をまわす。座っている悠は、当然立っている咲希よりも低く、咲希は腰を曲げることになった。

答えを与えてやるために、咲希は悠のくちびるに自分のそれを押

し当てた。そして、まぶたを下ろす。
悠の手から落ちたスプーンが、テーブルに当たって乾いた音をたてる。

咲希は、呆けたようにわずかに開いている悠のくちびるの隙間から舌を差し入れる。

キスは水が欲しくなるほど塩辛かった。塩鮭の味だとわかってい
たけれど、咲希はそれを涙の味だと思った。

たっぷりとお互いをむさぼってから、ふたりは、どちらからとも
なくくちびるを離れた。

「わかった？ 俺の答え」

「 ありがと……」

また涙でも流しそうな悠に、咲希は優しく軽い口づけを与える。

「ばか」

「ばかで、いいよ」

「おまけに、けっこうHなんだ？」

悠のズボンのふくらみをひとなでして、咲希はにやりとした。

「いや、これは……」

「俺としたいんだろ？ やろ？」

なんでもないことのように言う本当は、咲希にとっては口に出す
だけでも鼓動が五割増になるほどのことなのだ。けれど、そんなこ
とはおくびにも出さない。

「でも、男同士でどこ使うか知ってる？ 多分、痛いだろうし、血
だつて出るかもしれないし……」

「大丈夫だよ」

咲希にだつて、どこを使うかぐらいは想像がつく。ひとつしか考
えられない。

そんなところにあんなものを、と思うとなんだかいやな感じがし
たが、それを悠に限定するなら、平気に思えた。多分、悠は咲希の
いやがることはしないだろう。

咲希はまた、悠とくちびるを重ねた。小鳥がついばむようなキス

を、何度も交わす。

悠も次第に覚えてくるようになって、気づけば咲希は、悠の座っていたイスに座らされていた。今、キスを受ける立場なのは咲希の方だった。

咲希は、優しいキスの合間に冷たい手が肌をまさぐってくるのに気づいた。悠の手が咲希をいとおしげに愛撫している。

シャツの舌から入ってきた手は、咲希の身体を余すことなくでまわす。さわられた部分は、火が灯されたように熱をおびた。

胸の突起にさわられて、咲希はむずがゆさを感じる。なにかもつたりないのだ。もつと強い刺激が欲しい。

悠の爪が、硬く立ち上がった突起を軽くひつかいた。

「あつ……」

とたん、咲希のくちびるから甘やかなあえぎがこぼれる。咲希は羞恥に頬を染めた。

咲希は、視線でキスをねだる。悠の、キスのせいで赤みを増したくちびるは、咲希を優しく刺激して、熱く熱くしていく。

キスはくちびるからはずれて、首筋へと移っていった。

時折、悠は歯を立てた。強く吸い、痕を残していく。

「見えるところにつけるなよ、痕……」

「見えないところならいい？」

咲希は、悠の背にまわしていた手を頭に移し、自分に押しつける。肯定、だ。

悠に痕をつけられるのは、決していやではない。その部分が熱くなって、そのあとでじんわりと熱が広がるからだ。

ズボンの前が張ってきて、窮屈だった。咲希は自分で前をくつろげる。それでも下着にはばまれて、窮屈なことに変わりはない。

けれども、悠にのしかかられているため、ひとりでズボンを下ろすことなどできそうにない。もどかしくてならなかった。

「んっ……は、あ……悠、ズボン……」

「ごめんね……我慢させちゃって」

悠は咲希のズボンと下着を足首まで引き下げた。

露わになった咲希の素肌は、汗で濡れていた。外気に触れると、メンソレータムを塗ったときのような清涼感が広がる。

「こんなになるまで放っておいてごめんね」

先端に悠が口づけた。

ぴり、と、咲希の身体を電気信号がめぐる。

「ちょ……そんなとこ汚い……」

「汚くないよ」

抗議の声を上げた先をさえぎり、悠が言った。奴隷のようにかすきながらも、悠のつゆ草色の瞳には自信が満ちている。

「それでも、さ。そんなとこなめられると、恥ずかしいだろ」

悠のくちびるや口中は、多分、咲希に快感をもたらすだろうけれど。

咲希はそういったことに免疫がないのだ。興味がなかったわけではないが、いわゆるお子様だったのだ。

誰よりもなによりも大切な、いとしい悠が、自分のそんなところに奉仕をしているところを想像すると、そんなはしたない真似はやめてほしいと哀願したくなる。

「本当は、咲希のそこ、なめてほぐそうと思ったんだけど。予定変更かな」

悠は咲希の前に指を出す。

「なに？」

「なめて。指」

「ん……」

咲希は言われた通り、悠の指を口に含んだ。

人差し指、中指、薬指。心を込めて、丁寧になめる。

指はほんのり塩辛かった。悠の汗の、味だ。

「ありがとう」

よくできました、とでも言いたげに、悠は咲希の鎖骨にもキスを落とした。

その甘さに酔っているうちに、咲希の後孔に濡れたものが差し込まれる。つい先ほどまで咲希がなめていた、悠の指だ。

引きつれるようにその部分が痛みはしたが、想像していたほどではなかった。

円を描くように、悠が指を動かす。

「なんか変だ……俺……」

身体が芯から熱くなってきているような気がして、咲希は身をくねらせる。その間に、指は二本、三本と増やされていく。

悠の指が奥のある一点に触れたとたん、咲希の身体が震え、そして跳ねた。

「ふっ……ああ、ん……」

押さえようとしても、声はこぼれてしまう。膝ががくがくと震えた。

咲希は両手でしっかりと悠を抱きしめ、めいっぱいに足を開く。

足首に引っかかっていた下着とズボンが床に落ちた。

「息、吐いて……」

悠が咲希の耳元で、なかばかすれた声で言った。

咲希の中から指が出ていき、代わりに熱いものが押し当てられる。

咲希は言われるまま、肺の中の空気を少しずつ出していった。

圧迫感。

熱いものが肉を割り開き、咲希の奥深くへと侵入を果たす。身体が悲鳴を上げた。肉のきしむ音が聞こえる。

「っ……痛っ……」

簡単に侵入してはきたけれど、咲希の内部で脈打つ異物は、やはり大きい。痛みは少し遅れてやってきた。

「痛い？ ごめ……」

悠が身を引こうとする。咲希は悠の腰に足をからめ、それを拒んだ。

上目づかいにらみつけ、抱きしめる腕に力を込める。

「ばか」

悠は、なにもわかっていないに違いないのだ。咲希は悔しくてたまらなかった。少しも、伝わっていなかったのだ。

「俺は、痛いのもつらいのも苦しいのもわかってて、それでもおまえに抱かれたらって言ったんだ。ここでやめたら、俺の気持ちはどうなるんだよ」

抱きあって、互いの熱で融けあいたいと思った。

ほかの誰でもない悠だったから、受け入れた。

愛しているから、という陳腐な言葉でしか表せないのがもどかしいくらい、強い強い想いがあるというのに。

きつと、悠は知らないのだ。

「ごめん」

悠から、こめかみにキスを贈られる。額、まぶた、鼻先、そしてくちびるにも。

それだけで、咲希の身体のコわばりがほどける。そう、なにも怖いことはないのだ。

悠が、咲希を損なうようなことをするはずがない。

「大丈夫……平気」

咲希は、自分で中心に触れた。ゆるゆると手を動かし、痛みをこまかそうとする。

悠の大きな手も添えられた。それだけで、咲希は自分がさらに昂ぶるのを感じる。

「……あ、んあ、……つく、あつ……」

次第に、痛みは遠のいていく。代わって、咲希の身体には快い疼きが育っていく。

咲希は自ら腰を振り、貪欲に快楽をむさぼる。目の端には涙が浮かび、拭われることもなくすべり落ちる。

自分が、痛いほどに張りつめていくのがわかった。

「あ、悠……」

そうして、ふたりは、熱に浮かされて求めあった。なにかにつき動かされるようにして、何度も、何度も。

香ばしい醤油の匂いがただよっている。今日の夕飯はなんだっけ……と思いつながら、咲希は目を覚ました。

隣ではいとしい悠が、咲希に腕枕をしていた。

咲希は悠の胸に顔を埋め、しばし幸せの余韻にひたる。床は固くて寝心地が悪いが、やわらかいタオルケットが素肌に触れる感覚は快適だ。

「あれ……いつのまに……？」

タオルケットなど、どこから持ってきたのだろう。ここはキッチンのはずなのに。

「やっと思きたのね」

リズムカルな包丁の音とともに、美知子の声が降ってきた。

「え……！ 母さん!？」

咲希はがばつと起き上がった。情事の痕跡がそこかしこに残っているはずなのだ。あれを見られたら、まずいなどというところではない。

「掃除はしておいたわよ。でも、次からはベッドでしてちょうだいね」

「……怒らないんだ？」

なにをしていたのか、美知子にはとうにばれていくということか。そうわかると、咲希の口調が自然とぶっきらぼうになる。

「叱って欲しいの？」

咲希たちに背を向けたまま、おっとり美知子は言った。

「別にそんなんじゃない……。だってさ、俺が悠となにしてたか、わかってるだろ」

「そうね。でも、好奇心でそんなことしたんじゃないことくらい、わかってるもの。本当に好きなのよね。だったら、大切にすべきでしょう」

咲希は目許をゴシゴシこすった。

美知子は、すべてわかった上で、それでもいいと言ってくれているのだ。

頭ごなしに叱るでもなく、見なかったことにして否定するでもなく、美知子は丸ごと咲希を信じてくれた。それは、普通ならありえないことなのだろう。

「悠くんなら、咲希を大事にしてくれるわ。めいっぱい幸せになりなさい」

多分、これから、美知子にはたくさん迷惑をかけることになるだろう。

咲希と悠は異端だから。そして、子供だから。

誰かに知られてしまったら、責められるのは美知子なのだ。けれども、幸せになるように、と言ってくれている。

どんなに感謝したとしても、たりないほどだ。

「……俺、悠とシャワー浴びてくる」

少なくとも、ここでは恋人同士でいられる。

外の風がどんなに冷たかろうと、この家の暖炉には常に火があかあかと燃えている。

それは、普通ならありえないことで。

咲希は暖かいものが胸を満たすのを感じながら、悠を揺り起こしにかかった。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2847c/>

塩鮭味の口づけ

2009年3月24日09時50分発行